

2008年9月8日(月) 篠原メモ V2 To Koei Co., Ltd.

来訪後1週間の大学教員及び試行授業実施予定教員との面談等による

第三年次指導書改善に関する意見あるいは提言

— Some Suggestions/Recommendations —

after past one-week meetings with project staff and teachers

前提

本年度(第三年次)は、本プロジェクトの過去2ヵ年の継続としての「第三年次」であるとともに、最終年度でもある。

また、対象とする第9年生(15歳)は、**発達段階の特徴**としては、一般に、

- (1) 論理的な考え方ができるようになり、興味関心がいっそう旺盛
- (2) 義務教育の最終年度で、高等学校入学の前年度であり、自立心、責任感が強くなるなどが、特徴である。

1. 試行期間

当初計画の2000年11月17日から12月27日は変更が可能であれば、一部そのように願いたい。

篠原の11月来訪は、11月8日(土) 成田発朝9時20分、16時UB着

帰国は、11月19日(水) UB発11時45分

2. 検討のための「第三年次指導書企画内容等資料」(モンゴル語版、Dulamaaさん日本語訳)

(1) 冒頭「指導書の3つの特徴」のうち、第一の「子供の発達段階に合わせる」ことは、本プロジェクトの当初からの目標であり、不要(むしろ、本指導書末尾に「付録」として記述する)。

これに代えて、後述すること(特に、マルチメディアの特性)から、

「個性に応ずる教育に努める」

が、良いと思われる。

(2) 「試行授業のテーマ」

日本の教育課程等参考とし、かつ、本プロジェクトのこれまでの5、6年生(第一年次)、7、8年生(第二年次)の継続性と内容の関連性を考慮して、

「3. 情報倫理、情報を活用する文化」と「6. 情報のセキュリティ・暗証の基礎」は、「メディアリテラシー」の概念を加えて、一つにまとめ、

新たに第6項目目として、「簡単なプログラミング」を加えてはどうか?

理由は、

(i)世界の流れであった「コンピュータの活用」を取り入れていくことは重要であるが、モンゴル独特と当初判断し推進してきている「**コンピュータ教育（情報科学の基礎）**」を捨てないこと（**モンゴルらしさ＝モンゴルマイクェ＝の堅持**）、

(ii) これまでの試行で、「プログラミング」や「システムの思考」の基礎として、順序だてて考えること（料理の手順など）、ビット、バイト、数の仕組みなどが、教授されていること、

(iii)プログラミングは、**情報科学の重要な概念と課題**である「**制御**」「**モデリング**」「**ネットワーク**」「**データベース構築**」に関連すること（一方で、第二章 2.1「マルチメディア技術を利用しトレーニングコンテンツの作成方法」、第三章 3.2「生徒を評価する際にマルチメディア技術を使う方法」があり、これら「マルチメディアは、「制御」に対するもう一方の重要な「**デザイン**」「**表現**」が強調されるであろうから）。

なお、これら「デザイン」「表現」は、まさにストレスのない「**個性**」的な**成果の評価**が求められる。

また、試行授業のテーマ「5. インターネット上の情報と社会における役割」については、「情報の活用」という視点のみではなく「インターネット社会、情報社会に積極的に参加する」あるいは「情報の発信」という観点から、**すでに学習してきている Word の Web 保存を使った簡単なホームページ作成を、グループ学習（本年度のねらいの一つとして提案されているチームを組んで）のもとで実施したらどうか、を提案。**ただし、文部省のガイドラインには、第10年次生（高校1年）に「ホームページ作成」があるので、タグなど詳細には触れないこと。もっとも、Web 保存後の Source ファイルを見せて、第二年次までに学習した16進数が使われていることを見せることは、**学習意欲の高揚**には役立つはずと指摘。

（3）第二章 2.1「マルチメディア技術を利用しトレーニングコンテンツの作成方法」と第三章 3.2「生徒を評価する際にマルチメディア技術を使う方法」は、いっそう具体化、実現させること。

特に前者は、購入しなければならない「Flash」を使わなければならないという趣旨の記述は、違法コピーを戒める内容となりであろう本指導書の趣旨に合致せず、改めるべき。むしろ、多種類のソフトウェアの特徴と利用例を挙げ、目的、教師の力量、生徒の実態に即して使うべき、との記述にとどめることを提案。

後者については、下記（5）参照。

（4）第三章 3.1「能力の評価」は、**IT コンピテンシー**を明確にし具体化すること。詳細なIT教育のコンピテンシーは、「付録」に加えると良い。また、**他の教科・領域**（算数・数学、理科など）のITコンピテンシーについても、「付録」に掲載すると良い。

(5) 最終年度のまとめの成果の一つとして、
「**評価問題データベース**」「**宿題データベース**」を開発し、ネットワークで検索し、発達段階に応じた指導がプロジェクト以外の先生でも、容易に実現できるようにすることが望まれる。

これについては、IT のみではなく、**他の数学、理科等の教科・領域の関係者にも働きかけ、整備していくことが必要である。**

このデータベース内の**問題例**を、第三章 3.2 に記述すると良い。

以上